

## 第2章 わが国における建設業のイメージアップ活動の事例

### (1) 建設業のイメージアップ活動の概観

建設業のイメージアップについては、行政・各建設業団体・各建設関連企業等においてこれまでも実施されているところである。

(社)日本建設業団体連合会(日建連)加盟企業、(社)全国建設業協会加盟の都道府県建設業協会、及び(社)建設産業専門団体連合会(建専連)加盟団体に対するアンケート(技能教育の実態等に関するアンケート調査：平成14年11月～平成15年1月)の結果から、建設業のイメージアップ活動として取り組まれている代表的なものとして以下のようなものがある。

#### <日建連の加盟企業>

- ・ 現場見学会の実施
- ・ 現場の美化活動(周囲の清掃の実施、仮囲いのデザイン化、フラワーポットの配置等)
- ・ 建設業の理解促進のためのパンフレット・ビデオの作成と配布

#### <都道府県建設業協会>

- ・ 現場見学会の実施
- ・ 建設業をテーマとしたイベントの実施
- ・ 絵画・ポスター・写真のコンテストの実施
- ・ 優秀技能者の表彰
- ・ 建設業の理解促進のためのパンフレット・ビデオの作成と配布

#### <建専連の加盟団体>

- ・ 建設マスターの推薦・優秀技能者の表彰
- ・ 技能グランプリ・技能オリンピックへの協力

上記の活動のうち、現場見学会・イベント・コンテストの実施、現場の美化活動、パンフレット・ビデオの作成については、第三者に対する建設業のイメージアップ・理解促進のための活動で、優秀技能者の表彰については、建設技能労働者の意識改革・モチベーション向上のための活動であると言える。また、現場の美化活動は、現場労働者の労働環境改善と第三者へのイメージアップのための活動である。

このような、これまで行われてきた建設業のイメージアップ活動について、以下に詳しく述べる。

### ①建設産業 I I (Industry Identity) 戦略

平成元年3月に旧建設省は、「活力と魅力あふれた建設産業」を目指すため、「若年建設従事者の確保」等を重点課題として設定し、平成元年度から3カ年度にわたって課題解決

のために着手すべき事業を「第一次構造改善推進プログラム」として取りまとめた。この「第一次構造改善推進プログラム」で若年建設従事者の確保に対する事業の一つとして、建設業全体のアイデンティティを確立するために「建設産業 I I 戦略」を展開し、産業イメージの向上等についての事業を実施した。

また、平成 4 年度から 6 年度までの 3 ヶ年度において、「建設産業の健全な発展の促進」を目的として、重点的に実施すべき行動計画を示した「第二次構造改善推進プログラム」が策定された。「第二次構造改善推進プログラム」では、新たに「建設産業に対する理解の増進を図ること」が重点課題として掲げられ、「第一次構造改善推進プログラム」に引き続いて、「建設産業 I I 戦略」事業を展開した。

建設産業 I I 戦略事業の内容等について以下に示す。

#### ＜第一次構造改善推進プログラム＞

##### ①ショーウィンドウとしての現場の改善

- ・良くも悪しくも建設業のショーウィンドウは「現場」であるが、現状はむしろここでマイナスイメージが築かれている。
- ・労働者の作業環境の改善も含め、ショーウィンドウという目で現場をとらえ改善を図る。

##### ②用語の総点検

- ・「御施主様」、「日雇い」、「準直用」等々建設業の用語は解りづらいものが多い。
- ・こうした用語の裏には多くの場合、建設業の問題点が隠されている。
- ・建設業の用語を総点検し、国民にとって解りやすい用語の形成を図る。

##### ③マスメディアの活用

- ・不特定多数を顧客としない建設業ではマスメディアを通じた P R 活動はあまり行われていない。
- ・国民、特に若者、婦人層、場合によっては児童等を対象にマスメディア、刊行物等による P R を組織的に行う。

#### ＜第二次構造改善推進プログラム＞

##### ①マスメディアの活用等による建設産業の P R

- ・自らの創意工夫により、生産基盤・産業基盤を創造していく建設産業本来の使命・魅力を国民各層に正しく P R する。
- ・新聞、雑誌、テレビ等マスメディアの活用、ビデオ、ポスターの作成、啓発映画の制作等により、建設現場で働くことの素晴らしさ、クリエイターとしての建設産業の魅力を P R する。また、ワーキングウェアファッションショー、若手建設経営者によるディスカッション等のイベントを実施する。
- ・「これは私が作ったんだ」運動（シンボリックな建設生産物の建設に参画した建設技能労働者の刻名碑の整備）を実施する。

##### ②建設産業構造改善推進週間の設置

- ・構造改善事業を一層推進するため、建設業法が公布された 5 月 2 4 日を基準に建設産業構造改善推進週間を設け、国、地方を通じ、構造改善の必要性を積極的に P R し、構造改善に対する正しい理解を得るよう努める。

また、建設産業 I I 戦略において実施された活動の中から、子供や若年者に対して建設業の魅力をアピールする取り組みを以下に紹介する。

<p>○仮囲いの外から作業が見られる窓の設置</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現場の作業過程を見てもらい、工事への理解と協力を得る目的で実施。</li> <li>・大人用、子供用で高さを変えて設置した。</li> <li>・作業について質問を受けるなど、コミュニケーションのきっかけにもなった。</li> </ul>	
<p>○父親が働く作業所で子供参観を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・父親の仕事に対する理解を深めてもらうために実施。</li> <li>・原子力発電所の工事作業所に作業員の家族を招待し、見学してもらった。</li> </ul>	
<p>○大型重機への試乗会・見学会を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地元の小学生等の大型重機に対する関心が高く、その要望に応えるために実施。</li> <li>・大型ダンプトラックや大型重機類を配置し、見学者に運転席やキャビンに乗ってもらった。</li> <li>・作業所が近代化・大型化していることを実感してもらった。また、「機械オペレーターになりたい」と作文に書く児童もいた。</li> </ul>	
<p>○地元の工業高校で講演</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地元の工業高校からの要望に応じて実施。</li> <li>・共同企業体工事事務所長が、地元の工業高校で開催された「土木の日」記念集会で講演をした。</li> <li>・建設現場の実状について理解してもらえた。</li> </ul>	<p>土木の日記念集会</p> 
<p>○展望デッキの設置</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現場がよく見える位置に、展望デッキを設置。工事説明パネルや模型も展示。</li> <li>・地元住民に対して建設工事の理解と興味を深めることできた。</li> </ul>	

<p>○もみの木の電飾ツリー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・空港近くの現場出入口に高さ10mのもみの木を植え、電飾ツリーに仕立てる。</li> <li>・地元住民や空港を利用する人々等、幅広く観賞してもらった。ラジオの生中継等でも取り上げられ、記念写真を撮るなど現場とのコミュニケーションが増えた。</li> </ul>	
<p>○建設廃材を近隣に提供</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・建設廃材の中から型枠材の木端材を近隣住民に提供。</li> <li>・近隣住民とのコミュニケーションのきっかけとなり、工事内容等について質問を受けたりするようになった。</li> </ul>	
<p>○毎週土曜日の一斉清掃</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・作業所の前及び周辺道路の一斉清掃を毎週土曜日に実施。</li> <li>・清掃中に歩行者から声をかけてもらえるようになった。また、日頃から作業所内外の整理整頓を心掛けるようになった。</li> </ul>	

建設現場イメージアップ事例集「明日の顔はどんなカオ」及び現場環境改善の手引「明日の顔はどんなカオ2」より

## ②建設産業人材確保・育成推進協議会（若年建設従事者入職促進協議会）

建設産業人材確保・育成推進協議会（人材協）は、各都道府県の建設業協会に設置され、若年者の入職・定着活動を実施している。

建設業のイメージアップ・若年者の入職促進を目的に実施している活動内容（平成11年～平成13年）についてレビューした。活動内容は、概ね、次のように分類できる。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 教育機関との情報交換</li> <li>b. 現場実習の実施</li> <li>c. 現場見学会の実施</li> <li>d. 機関誌／関連図書／PRビデオの配布</li> <li>e. イベント／フェスティバルの開催</li> <li>f. テレビ／新聞／ラジオ等による広報活動</li> <li>g. 若年就業者からのメッセージ紹介</li> <li>h. 地域奉仕活動の実施</li> </ul> |
|---|

#### a. 教育機関との情報交換

新卒者の建設業への入職促進のため、教育機関の進路指導教諭等と情報交換を行う場を設定しているところが多い。主な内容は、卒業生の進路決定状況、各建設業協会参加企業の採用状況、意見交換等である。

高等学校を対象に実施しているところが多いが、中学校・専門学校・地元の大学も対象にしているところもある。その他、特徴的な活動を次に示す。

- ・ 高等学校土木学科のPRと入学促進のため、中学生向けのパンフレットを作成している。(高知)
- ・ 入職促進パンフレット／リーフレットの作成(千葉・滋賀・広島・岡山・熊本など)
- ・ 入職促進ビデオの作成(長野など)
- ・ 求人情報誌の作成(大阪・香川など)

#### b. 現場実習の実施

工業高校・農業高校の生徒を対象に、建設現場での技術・知識の習得と体験により、進路意欲の啓発と健全な勤労感、職業観の育成を図ることを目的に現場実習を実施している。現場実習に参加する生徒は3年生であることが多いが、2年生を対象としているところもある。実習期間は、1日～14日と幅があるが、2日～5日の場合が多い。

授業の一環として現場実習を位置付け、実習経験者に感想文(報告書)を提出させている学校も多い。

なお、現場実習の実施にあたっては、次のような課題が指摘されている。

- ・ 実習生の受け入れ企業の減少
- ・ 実習期間と時期(実習は夏休み期間が多いが、工事の少ない時期)
- ・ 費用負担
- ・ 万一の事故発生時の対処・責任

#### c. 現場見学会の実施

bの現場実習とは別に、現場見学会を実施している協議会も多い。工業高校、農業高校等の生徒が主であるが、小中学生、父兄等を対象に実施しているところもある。

#### d. 機関誌／関連図書／PRビデオ等の配布

建設業協会の機関誌、建設業の関連図書を学校に配布し、建設業界のPRに活用している。

栃木県、兵庫県、熊本県等の協議会は、独自にPR用資料を作成している。配布先は、建設系学科を有する工業高校等が多い。また、青森県、長野県、富山県等の協議会では、PRビデオを作成・配布・上映している。これらの活動については、生徒・児童に感想文を提出させている学校も多い。

#### e. イベント／フェスティバル等の実施

一般市民も参加できるイベント／フェスティバルを実施している。主な内容を以下に示す。一部のイベント等において優秀者等への表彰を実施しているところもある。

- ・ 木工作
- ・ 作文／絵画コンクールとその表彰
- ・ パネル展示
- ・ 建設機械の試乗
- ・ 講演会

#### f. テレビ／新聞／ラジオ等による広報活動

宮城県、埼玉県、三重県、高知県、徳島県等では、マスメディアを利用して、建設業のPR、上記⑤のイベント等の案内を実施している。

#### g. 若年就業者からのメッセージ紹介

すでに建設業に入職して活躍している若年就業者のメッセージを取りまとめ、工業高校等の生徒に配布し、入職促進の一助としている。また、メッセージに対し表彰しているところもある。

#### h. 地域奉仕活動の実施

地域社会の一員として、周辺道路、河川、等の清掃活動を実施しているところが多い。中には、献血に参加しているところもある。

#### i. その他

その他、特徴的な活動を次に示す。

青森	PR用ラジオ放送（平成11・12年）	建設現場見学会を実施した専門学校の教師、事業所、建設業協会青年部の三者をゲストに招き、「つくるってすばらしいー21世紀へのかけ橋ー」をテーマに語った放送
茨城	ログハウスの建設（平成11年）	平成6年より、茨城県内の中学校1校を対象にログハウス1棟（9.9m <sup>2</sup> ）を寄贈している。その建設にあたり、基礎工事から組立まで、寄贈校の生徒に参加してもらい「モノ造りの喜び」を体験してもらっている
神奈川	ワーキングウェア・デザインのコンテスト（平成11～13年）	建設業のワーキングウェア（作業服）に適したデザイン画を、安全性も考慮して自由にデザインしてもらおう。対象は、高校1～3年生及び専門学校生
静岡	土木技術の無料相談（平成11・12年）	清水みなと祭りに協賛し、土木技術の無料相談を行った
滋賀	交通遺児援護の育英	建設業協会会員の総意により、交通遺児援護のための育英資金を贈

	資金贈呈（平成11～13年）	呈
京都	女性労働者のネットワーク作り（平成12年）	女性の建設業従事者（若年女性労働者を含む）のためのホームページを開設し、女性労働者のネットワークをつくり、情報交換により共通の問題を協議し、職場環境の改善等、女性が働きやすい職場づくりを目指す
島根	PR本の作成・配布	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生向けビデオ「ビッグチャレンジ21」</li> <li>・小学生向け漫画「夢・まち 探検隊」</li> <li>・幼児向け飛び出す絵本「きかい は 力もち」</li> </ul>
山口	高校生の意識調査（平成11～13年）	建設現場見学会に参加した高校生を対象にアンケート調査を実施
宮崎	高校生の意識調査（平成13年）	建築科に入学した高校生（3年生）の建設業に対する意識調査を実施

上記のような活動は、第三者に対する建設業のイメージアップ・理解促進のため、また、建設業従事者の社会的地位・評価の向上のため、継続していくことが必要である。特に、建設業に対する理解を促進させるために、第三者を取り込んだ活動が重要になると考えられる。

## (2) 建設業のイメージアップ活動の事例

本節では、建設業のイメージアップ活動の事例について、その実施主体別に実施したヒアリング調査等を基に述べる。

### ①東急建設株式会社

<b>a. 建設業のイメージアップ等に資する活動の概要</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 超高層ビル建設時の現場周辺・現場内に関するイメージアップとして、現場独自のキャラクター作成・案内等の看板・ポスター等、ビジュアル面から取り組んだ。</li><li>・ 現場のキャッチコピー「ただいま未来、制作中」を定め、現場紹介パンフレット・安全ネット・現場仮囲い等に掲示した。</li><li>・ 職長のために現場オリジナル制服、安全帽を作成し着用させた。</li><li>・ ワッペン、Tシャツ、うちわ等のオリジナルグッズを製作し、現場作業員に配布した。</li><li>・ 現場での労働環境の改善のため、現場内施設（休憩所、事務所、食堂、職長の詰所等）を清潔なものとした。また、女性専用の食堂・トイレを別途に設けた。</li><li>・ 現場の作業員の家族を招待したり、一緒にパトロールを実施した。また、歌手を呼んで家族慰安会を開催した。</li><li>・ 建設途中に地元の小学校の3年生を現場見学に招待し、竣工時、全学年を招待した。ある年は、途中階で写生大会を実施した。</li></ul>
<b>b. 活動の推進体制／連携相手</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ キャラクター・案内等の看板等のデザインは、デザイン会社に依頼して作成してもらった。また、デザイン化にあたって、発注者の企業カラーを使用することとした。</li><li>・ 現場見学会は、地元の小学校の校長に直接申し出た。</li></ul>
<b>c. 活動に対する反響／効果</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 現場見学会後に、児童の感想文を書いてもらっていたが、その中に「おもしろかった。建設業をやりたい」という内容のものが見受けられた。</li></ul>
<b>d. 活動の実施に当たっての課題／問題点</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 現場見学会では、児童の安全確保に特に留意を有する。</li></ul>
<b>e. その他の特記事項</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 上記のような活動の費用は全体で約1,000万円であった。</li><li>・ こうした活動を実施するためには、ある程度以上の規模の現場に限られてくる。現在の建設企業の経営状況では、規模の小さな現場では困難と考えられる。</li></ul>





図 2 - 1. ビル建設現場のオリジナルキャラクターとキャッチコピー



図 2 - 2. ビル建設現場のオリジナルグッズ

## ②CCI東京

<p><b>a. 建設業のイメージアップ等に資する活動の概要</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ CCI東京（Charming Construction’s Identity）は、建設業のイメージアップのために、行政・業団体・学識経験者等を構成員として活動している。現在、事務局は東京都建設局にあり、活動内容の企画等はこちらが中心に行っている。</li> <li>・ 以下の活動を展開中             <ul style="list-style-type: none"> <li><b>i)「親と子のふれあい体験ツアー」</b> （小学生4～6年生及びその保護者を対象に、建設現場の見学会を開催）</li> <li><b>ii)「建設ステーション見学会」</b> （建設業への入職促進を目的に、建設系の専門学校生を対象に、建設現場の見学会を開催）</li> <li><b>iii)「建設ステーション優秀技能者の顕彰」</b> （優秀技能者に対する顕彰。約20人／年）</li> <li><b>iv)「建設ステーション元気アップコンテスト」</b> （建設現場の労働環境改善等の活動をコンテスト方式で審査・表彰）</li> </ul> </li> <li>・ 「親と子のふれあい体験ツアー」は、年1回10月頃、バス2台80人程度の規模で実施している。</li> <li>・ 「親と子の～」の参加者応募者は、毎年、定員の約2倍。応募者多数の場合は、抽選を行う。</li> <li>・ 「親と子の～」において、建設現場での説明は、発注者が事業の説明、施工者が工事・作業の説明をすることが多い。子供向けの資料を作ることはない。</li> <li>・ 「親と子の～」では、安全上、現場が止まっている状態を見てもらっている。万一のために、保険をかけている。</li> </ul>
<p><b>b. 活動の推進体制／連携相手</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 年度当初に、「親と子の～」に適した現場を上げてもらい、1箇所を選定する。</li> <li>・ 「親と子の～」の実施に当たって、見学現場の近隣地域の小学校に対して案内を配布している。その他、東京都の広報紙、CCI東京のHP、新聞等への投げ込みで参加者を募集している。</li> <li>・ 「親と子の～」の実施に当たって、教育機関等との連携は行っていない。</li> </ul>
<p><b>c. 活動に対する反響／効果</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子供たちは、機械類に関心を示す傾向が強い。事後の感想でも、機械が動いているところをナマで見られてよかった、機械を動かしてみたいとするものは多い。</li> <li>・ アンケートで、どんな建設現場を見たいかを調べると、地下鉄・トンネル等、地中の工事が多い。</li> <li>・ 保護者は、建設現場の整然とした様、機械等の近代化された面に、感心している。</li> </ul>
<p><b>d. 活動の実施に当たっての課題／問題点</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「親と子の～」の実施に当たっては、バスの手配、保険料等の予算の関係、また、事務局業務の手間等の関係から、1年に1箇所、80名が限界。</li> <li>・ 見学会を平日にして、現場が動いているところを見せるのは、安全上、難しい。また、施工者にとっても現場を止めることは難しい。</li> <li>・ 子供たちに対して、難しい説明、細かい説明の部分は理解してもらえない。</li> <li>・ 近年、80人程度の見学者を受け入れられる建設現場が少なくなっている。</li> <li>・ 建設機械の作業は、遠方からも見学できるので、安全上も好都合といえる。</li> <li>・ PR、参加者募集等で、HPの有効な活用が望まれる。</li> </ul>
<p><b>e. その他の特記事項</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「親と子の～」は、建設現場の中を見てもらうことを主目的としているので、建設技能に焦点を当てた説明、見せ方はしていない。</li> <li>・ 技能を理解させるという点では、まず、子供たちに何かをやらせてみて、次に技能者がプロの技を</li> </ul>

- 見せるようなイベントがよいのではないか。これで、技能の意義・素晴らしさを感じてもらえれば。
- ・ C C I 東京という組織の性質上、「親と子の～」等は、事務局が一手に活動を仕切っている。建設現場の地元密着型の小さな活動の方が、幅広い活動、緻密な活動が可能であり、その方が効果も上がると考えられる。



図2-3. 「親と子のふれあい体験ツアー」の実施状況（CCI東京HPより）

### ③ C C I 埼玉

<p><b>a. 建設業のイメージアップ等に資する活動の概要</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ C C I 埼玉 (Charming Construction's Identity) は、建設業のイメージアップのために、行政・業団体・学識経験者、県の教育関係機関、県の工業高校校長会等を構成員として活動している。現在、事務局は埼玉県県土整備部にあり、活動内容の企画等はこちらが中心に行っている。</li> <li>・ 以下の活動を展開中             <ul style="list-style-type: none"> <li><b>i) 「小中学生の建設技術教室」</b> (埼玉県民の日に、小学生・中学生及びその保護者を対象に、建設現場及び関連施設(科学館等)の見学会を開催)</li> <li><b>ii) 「工業高校生の現場見学会と現場実習」</b> (建設業への入職促進を目的に、土木学科・建築学科等の2年生を対象に実施)</li> <li><b>iii) 「若手建設技術者・女性の建設業就業者との意見交換会」</b> (処遇改善・労働環境改善等の課題、それぞれの考えについて意見交換会を実施)</li> <li><b>iv) 「優秀技能者の顕彰」</b> (優秀技能者に対する顕彰。約20人/年)</li> <li><b>v) 「建設スナップ写真コンテスト」</b> (建設現場に関するスナップ写真をコンテスト方式で審査・表彰)</li> </ul> </li> <li>・ 「小中学生の建設技術教室」は、バス2台80名程度で実施している。</li> <li>・ 「小中学生の～」において、建設現場での説明は、施工者が行うことが多い。現場に関連するパンフレット等がある場合は配布するが、子供向けに特別に資料を作ることはない。</li> <li>・ 「小中学生の～」は、小中学生が対象ということで、安全面には特に配慮している。</li> <li>・ 「工業高校生の現場見学会と現場実習」は、現場見学的な色彩が強い。建設現場での体験実習は、最近、実施していない。</li> <li>・ 「工業高校生の～」については、事後感想を冊子として取りまとめている。</li> </ul>
<p><b>b. 活動の推進体制/連携相手</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「小中学生の～」の実施に当たって、埼玉県の広報紙、C C I 埼玉のHP、テレビ番組で参加者を募集している。小学校・中学校に対して、直接働きかけるようなことはしていない。</li> <li>・ 「小中学生の～」の実施に当たって、教育機関等との連携は行っていない。</li> <li>・ 「工業高校生の～」では、民間企業の研修センターを利用して、重機の操作体験等をしている。この実習は有料で、費用はC C I 埼玉が負担している。</li> <li>・ 14年度には、若手の建設技術者を工業高校に派遣して、高校生との意見交換を実施することを企画している。</li> </ul>
<p><b>c. 活動に対する反響/効果</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 普段見ることのできない建設現場を見られてよかったという感想が多い。</li> <li>・ 「小中学生の～」 「工業高校生の～」共に、授業中の学習とは異なり、実物を見る・体験するという意味で効果はある。</li> </ul>
<p><b>d. 活動の実施に当たっての課題/問題点</b></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「小中学生の～」では、安全上、実際に作業中の場所には連れて行けない。現場の担当の方には、参加者に危険が及ばない範囲で、ということをお願いしている。</li> <li>・ 「小中学生の～」について、近年、多くの見学者を受け入れられる建設現場が少なくなっている。受け入れ現場の確保が課題である。</li> <li>・ 「小中学生の～」は埼玉県民の日に実施しているが、他のイベント等と競合して参加者が集まらない。PRの方法が課題である。</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「工業高校生の～」では、体験実習をもっと実施したいが、参加者が限られること、受け入れ現場が少ないことが課題である。</li> </ul>
<p><b>e. その他の特記事項</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 目新しい活動がなく、苦慮している。</li> <li>・ C C I 埼玉の活動は、埼玉県が主体的に行っているが、業界サイドがより積極的に取り組むことが重要である。</li> <li>・ 建設業への女性参画の促進を目的として「彩の国建設ウーマンスタイルブック」という冊子を作成した。</li> <li>・ C C I 埼玉の活動等について、広く情報発信をするためにHPを開設した。</li> </ul>



図 2 - 4 . 「小中学生の建設技術教室」の実施状況（C C I 埼玉HPより）



図 2 - 5 . 「工業高校生の現場見学会と現場実習」の実施状況（C C I 埼玉HPより）



図 2 - 6 . 「彩の国建設ウーマンスタイルブック」の表紙

#### ④社団法人 日本土木工業協会

<b>a. 建設業のイメージアップ等に資する活動の概要</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 以下の活動を展開中<ul style="list-style-type: none"><li><b>i) 「100万人の現場見学会」</b> (会員企業の建設現場において、各界のオピニオンリーダー、建設現場近隣の住民・学校等を対象として現場見学会の実施)</li><li><b>ii) 「PRビデオの作成と配布(ゆたかな暮らしと社会資本)」</b> (土木業界のイメージアップ、入職促進を目的としたビデオを作成し、中学校・高校に配布)</li><li><b>iii) 「土木遺産の写真パネル展 / 写真集の刊行」</b> (土木構造物等の写真パネル展を全国にて実施。また、その写真集の刊行。これが契機となり、文化庁の重要文化財として土木遺産が指定されるようになった。)</li><li><b>iv) 「優秀技能者の顕彰」</b> (優秀技能者に対する顕彰。約20人/年)</li><li><b>v) 「子供を対象とした社会資本のパンフレットの作成」</b> (会員企業の現場見学会等の際に提供)</li></ul></li><li>・ 土工協では、子供たちを対象とした特別の広報活動は実施していない。一般人向けの現場見学会等の際、参加者の中に子供が含まれるようなことはある。</li><li>・ 「100万人の現場見学会」は、①土工協本部が中心となるもの、②土工協支部が中心となるもの、③会員企業が各自に実施するもの、の3つに分けられる。このうち、学校の児童・生徒、地域住民が対象となるのは②・③である。</li></ul>
<b>b. 活動の推進体制/連携相手</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 「100万人の～」の一環として、「晴豊1号橋下部工事」において近隣の小学5年生を見学会に招いた。</li><li>・ 施工者(下請業者)と小学校サイドが以前から知り合いで、個人的なルートで見学会が実現した。</li></ul>
<b>c. 活動に対する反響/効果</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 上記(2)の「晴豊1号橋下部工事」の現場見学会に関して。</li><li>・ 見学会の冒頭に公共事業の説明をしたが、子供たちはよく分からなかったようだ。</li><li>・ 発注者が事業の説明を、施工者が工事・作業の説明をした。</li><li>・ ニューマチックケーソンの原理について、模型を使って説明した。</li><li>・ ホスピタルロックを見せたところ、「中に入りたい」という子供がいた。</li><li>・ 無人機の遠隔操作に関心を示す子供が多かった。モニターを見ながらレバーを使って操作するというのが、子供たちにはゲーム感覚で面白かったのだろう。「やってみたい」「面白そう」と言う子供が多かった。</li><li>・ 現場見学後、集会所にて、オペレータ、鉄筋工、型枠大工、鉄筋工、現場監督等、職種毎の代表者にプラカードを付けさせて、子供たちと質疑応答を行った。</li><li>・ オペレータには、「失敗することはないのか？」という質問があった。</li><li>・ 型枠大工には、「どんな仕事をしているのか？」という質問があった。子供たちは、大工は「家を建てる人」という先入観があるらしい。</li><li>・ 子供たちの感想は、「面白かった」というものが大半だった。</li></ul>
<b>d. 活動の実施に当たっての課題/問題点</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 上記bの「晴豊1号橋下部工事」の現場見学会に関して。</li><li>・ 費用が相応にかかる。</li><li>・ 安全上の配慮が特別に必要となる。今回は、通路から子供が転落しないように、安全ネットをわざ</li></ul>

わざ取り付けた。また、見学中は作業を一時中断させた。

e. その他の特記事項

- ・ 発注者と土工協の意見交換会では、発注者サイドから、建設業のイメージアップのために「業界がもっと発言しろ」「協調して活動を」という意見がある一方で、「共同の活動は、官と民が癒着している」と思われることを懸念する意見もある。



図 2-7. パンフレットの表紙



図 2-8. 土木遺産の写真集（土工協HPより）

## ⑤社団法人 岩手県建設業協会青年部連絡協議会

<b>a. 建設業のイメージアップ等に資する活動の概要</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 青年部連絡協議会は岩手県内に13の支部を有し、会員企業数は約490社である。</li><li>・ 県下の小中学校を対象に「建設業ふれあい事業」を平成2年から実施。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」で実施される主な内容は次の通り<ul style="list-style-type: none"><li><b>i) 「測量体験」</b> (ソフトボール投げの結果を測量機器を使って計測し、クイズ形式で実施)</li><li><b>ii) 「建設機械乗車体験」</b> (高所作業車、バックホウ、タイヤローラ等の建設機械に実際に乗車)</li><li><b>iii) 「綱引き」</b> (建設機械の力を体験してもらうことを目的に、子供対建設機械で綱引きを実施)</li><li><b>iv) 「職人技術体験」</b> (鉄筋工や大工の仕事を、簡単な図面を見ながら実際に体験)</li><li><b>v) 「講演」</b> (地域の整備計画や公共事業の役割等、子供たちにとって身近な話題を提供)</li></ul></li></ul> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 「建設業ふれあい事業」は、建設業のイメージ悪化に伴う若年者の建設業離れを打破するために、建設業の顔である現場の状況を何らかの形で子供に伝えられないかということで始まった。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」は、子供の体験学習、勤労奉仕活動、親子現場見学会等を通じて、建設業の理解と関心を深めてもらうことを目的としている。</li><li>・ 子供たちが主な対象だが、子供の保護者や学校の先生も意識している。</li><li>・ 平成2～14年までに、187校、23,551人の児童・生徒が参加している。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」は、基本的に、各支部当たり1年に1校の割合で実施している。ただし、3～4年前から、中学校の校長会からの要請で、年に20回程度実施するようになってきた。</li><li>・ ある支部では、「建設業ふれあい事業」の実施後、記念植樹をさせてもらっている。</li></ul>
<b>b. 活動の推進体制／連携相手</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 「建設業ふれあい事業」は学校の課外活動ではなく、授業の一環として取り組んでもらっている。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」を始めるときに、学校、教育委員会、PTA等に活動の内容・趣旨を説明して回ったが、当初、なかなか賛同を得られなかった。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」は、現場見学会以外は、測量機器、建設機械、鉄筋等の資材等を学校に持ち込んでいます。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」の実施に当たっては、青年部連絡協議会のメンバーが中心に行っているが、建設機械等の体験乗車では、オペレータや建機メーカーの方にも参加してもらっている場合がある。また、講演では、地元の振興局等の発注者の方にも参加してもらっている。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」を実施するときは、地元の報道機関・記者クラブに対してPRをしている。</li></ul>
<b>c. 活動に対する反響／効果</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 「建設業ふれあい事業」に参加する児童・生徒は、非常にいい表情をしている。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」に参加した児童・生徒が、実際に建設業に入職するようになった。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」を実施した学校の校長から、お礼状をいただくようになった。</li><li>・ 「建設業ふれあい事業」の実施したある学校では進路指導に関して、建設業に興味を持った生徒がいるので建設業についての講演依頼を受けるようになった。</li></ul>
<b>d. 活動の実施に当たっての課題／問題点</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 授業時間中に実施しているので、時間が足りない場合がある。また、CADの実演等では、学校の施設上の制限からできない場合もある。</li></ul>



- ・ 講師役となる青年部連絡協議会のメンバーの力量にバラツキがある。
- ・ まだ、単発的な要素が強く、理解を示してくれる学校もあるが、そうでない学校もある。教育委員会等を通じて、学習・教育の一環として体系的に実施されるようになれば効果が上がると考えられる。

e. その他の特記事項

- ・ 「建設業ふれあい事業」を実施させてもらった返礼として、簡単な修繕や測量を実施する場合がある。
- ・ 県で統一的な実施マニュアルというものは作成していない。
- ・ 東北6県の東北建設業協会青年会連絡協議会で、平成12年度から、ラジオ番組を利用した建設業の啓蒙活動を実施している。
- ・ 秋田県では、秋田県建設業協会が平成2年から、やはり建設業の理解促進を目的に、子供を対象とした活動として「ランドアート」を実施している。



<測量体験>



<建設機械乗車体験>



<綱引き>



<職人技術体験>

図2-10. 「建設業ふれあい事業」の実施状況

## ⑥コマツ（株式会社 小松製作所）

<p><b>a. 建設業のイメージアップ等に資する活動の概要</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ コマツは、コマツの事業活動に関係する人々（ステークホルダー）とよりよい関係を築くための広報・宣伝活動をしており、将来のステークホルダーとなり得る子供・学生に対しても情報発信が必要であると判断し、子供向けの活動を展開している。</li><li>・ 子供たちを対象に以下の活動を展開中<ul style="list-style-type: none"><li><b>i) 「はたらくのりものチビッコ見学会」</b> (中伊豆の自社施設を利用して、子供たちとその保護者に対して建設機械のデモンストラーション・体験試乗等を実施。2歳から小学低学年の子供が多い)</li><li><b>ii) 「ケンケンキッキ(ウェブサイト)の運営」</b> (建設機械に関する情報発信、理解促進のために子供向けのウェブサイトを運営)</li><li><b>iii) 「ゲームソフト開発への協力・監修」</b> (建設機械の操作シミュレーションゲームの開発に対する協力と監修)</li><li><b>iv) 「建設機械の玩具商品化の協力・監修」</b> (建設機械の玩具化に当たって、玩具メーカーとライセンス契約を結び、情報の提供等を実施)</li><li><b>v) 「絵本・ビデオの作成協力・監修」</b> (出版社等の要請を受け、情報の提供等を実施)</li></ul></li><li>・ 子供たちを対象とした活動では、①まず、建設機械を知ることで興味と親しみを持ってもらい、②次に、建設機械の機能・使われ方を知ることで社会的役割を正しく理解してもらう、という段階に分けて活動している。</li><li>・ 子供たちを対象とした活動を展開する上で、①メーカーならではの正しい情報、わかりやすい表現を使用すること、②エンターテインメント性を取り入れる場合でも、本来の機能・目的から外れるような表現は排除すること、を心掛けている。(クレーン機能を使った人間UFOキャッチャー等の企画は持ち掛けられても断っている。)</li><li>・ インターネットの存在は非常に大きく、これを使って情報発信することで、多くの人々・子供たちとのコミュニケーションが可能となり、活動が加速した。</li></ul>
<p><b>b. 活動の推進体制／連携相手</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 「はたらくのりものチビッコ見学会」は、コマツ独自の活動で連携相手はいない。</li><li>・ 「ケンケンキッキ」は、社外のデザイナーと共同で製作している。基本的な企画はコマツで考え、キャラクター・見せ方については共同で行っている。</li><li>・ 「テレビゲーム開発の協力・監修」は、ソフトメーカーからの申し込みにより協力した。</li><li>・ 「玩具の商品化」は、玩具メーカーとライセンス契約を結ぶことにより、情報の提供等を行っている。</li><li>・ 「絵本・ビデオの作成協力」は、出版社等からの要請を受け、情報の提供等を行っている。</li></ul>
<p><b>c. 活動に対する反響／効果</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ 「はたらく～」のような体験試乗は、数多く行われているが、やはり人気が高いようだ。</li><li>・ 「はたらく～」の体験試乗後に興奮状態になる子供が多い。生まれて初めて自分で動かしたという実感からそうなるのではないか。</li><li>・ 「はたらく～」は、保護者も興味があるようだ。体験試乗後、保護者の母親が非常に喜んでいることが多く、これ以降、街で建設機械が気になるという話を聞いた。</li><li>・ 「はたらく～」に、参加する子供は「ケンケンキッキ」等で建設機械の名前等の知識を既に持っていることが多い。また、リピーターもかなりいる。</li><li>・ 「はたらく～」では、祖父がオペレータで、孫に建設機械を見せたいということで参加される人も</li></ul>

いる。

- ・ 「ケンケンキッキ」では、「けんせつきかいだいずかん」（建設機械の紹介）が最も人気が高い。
- ・ 昨年の企画の中に自由コメント欄を設けたところ、約3,000件の書き込みがあったが、そのうち約170件は建設機械に関連する職業に就いている人からの書き込みであった。
- ・ 「ケンケンキッキ」に関して、香川県教育センターより、授業作りの支援のために活用できるウェブサイトとしてリンクの申し込みがあった。
- ・ 「ケンケンキッキ」はキャラクターもかわいいものを使用しており、そこからはまる子供もいるようだ。キャラクターからのアプローチは、母親を意識している面もある。
- ・ 「玩具の商品化」についてはトミーのトミカシリーズがあるが、最も売れているのはブルドーザーということだ。
- ・ 建設機械は意外とハイテクで、そういう部分を見せると印象が変わるようだ。
- ・ 子供が建機に興味を持つのは、形、動きが特異だからではないか。ガーという音も、好きなようだ。
- ・ リアルな方が、子供たちへの受けはいい。子供向けだからといって、デフォルメしたり、幼稚なデザインにする方が、受けが悪い。
- ・ アニメを見せるよりも、実物のデモ・映像・写真等の方に興味を示す。
- ・ イベント、インターネット、絵本、おもちゃ等、様々な手段で、情報を発信してやることが重要。これにより、相乗効果が得られる。

#### d. 活動の実施に当たっての課題／問題点

- ・ 建設機械には、破壊・悪者という先行イメージがあるので、これを払拭させる必要がある。
- ・ 男児であれば、建設機械に少なからず興味を持つと思われるが、大概が一過性のもので終わってしまう。興味を継続させるために、情報発信の仕方でも子供の成長過程に即した方法・内容が必要ではないか。

#### e. その他の特記事項

- ・ 学校教育の総合学習に関心がある。建設機械を取り上げるだけで、様々な分野の知識を与えることが可能。例えば、生産工場は第2次産業の理解、海外の生産拠点は貿易・為替の理解、油圧はパスカルの原理の理解、環境配慮型建機は環境問題の理解、等、色々な切り口がある。
- ・ 「ケンケンキッキ」のデザイナーによれば、海外の働く人は格好よく見える。ワークブーツ、作業着は、まさにストリートファッションで、それを着て働くことは格好よく見えるのではないかと。



図2-11. 「はたらくのりものチビッコ見学会」の実施状況（コマツHPより）



図2-12. 子供向けウェブサイト「ケンケンキッキ」



<KENKI いっぱい！>



<パワーショベルにのろう>

図2-13. 操作シミュレーションゲーム

## ⑦愛知教育大学 寺本 潔助教授

<b>a. 建設業のイメージアップ等に資する活動の概要</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 地理学的な要素を利用した教育活動。</li><li>・ 平成12年度から国土交通省中部地方整備局の依頼により「社会資本(建造環境)を教材とした総合的な学習の時間実践指導書」を作成中。これは次のようなコンセプトを考えている。<ul style="list-style-type: none"><li><b>i)「発案(建造理由)」</b> (その地域にその建造物が造られたのか、その理由・発想。これについて考えさせることにより、児童・生徒が建造物に対して共感を抱く)</li><li><b>ii)「建設(現場工事)」</b> (建造物は建設という具体的な行為によってなされる。そこには、技術という工夫が存在する。また、設計から施工までの間にこそドラマがある。設計図や模型等が教材教具になる。)</li><li><b>iii)「デザイン(匠の技)」</b> (工業デザイン、建造物の形・色、素材の美しさ等、職人の匠の技によって作り出されたものが教材となる)</li><li><b>iv)「貢献(社会資本化)」</b> (建造物が地域開発や防災に貢献していることを認識させる)</li></ul></li><li>・ 平成15年2月に、国土交通省中部地方整備局等が主催で「建造環境から学ぶ総合学習シンポジウム」を開催した。このシンポジウムでは、5つの小学校で実施された総合学習の様態・成果の発表、基調講演、パネルディスカッションが実施された。</li></ul>
<b>b. 活動の推進体制／連携相手</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 従来の地理学的な要素を利用した活動は、小学校・中学校で実施している。</li><li>・ 「社会資本(建造環境)を教材とした総合的な学習の時間実践指導書」の作成は、国土交通省中部地方整備局、(社)中部建設協会、名古屋市教育委員会等とともに実施している。</li></ul>
<b>c. 活動の実施に当たっての課題／問題点</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 総合学習では、題材が何であっても、学習成果が上がり、学校の現場でも実施しやすく、児童・生徒が関心を持つプログラムが望まれるだろう。特に、学力が上がっていかないと学校には定着しない。</li><li>・ 学校が、総合学習で建設関係のプログラムを取り入れたいと思っても、何らノウハウも知識も持ち合わせていない。従って、建設関係の専門家によるチーム・ティーチングの推進が必要である。</li><li>・ 当面、建造物の模型が主要な教材となる可能性がある。</li><li>・ パンフレット類は非常に大量に存在するが、教育現場で全てが活用されているわけではない。明確な指針・マニュアル等が求められている。教材も必要だが、指導方法の確立も重要である。</li><li>・ 建設関係の総合学習を定着させるためには、建設業界サイドと教育現場サイドの条件整備をどのように調整していくかが課題であろう。</li></ul>
<b>d. その他の特記事項</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 一部の工業高校の教師から、学力の低い生徒が工業高校に進学する傾向があり、将来、優秀な人材を確保するためには、建設業のイメージアップを図り、学力の高い生徒が工業高校を志望するようになってもらいたいとの指摘がある。</li><li>・ 総合学習に関して、各産業・各団体が積極的な活動を実施している。</li><li>・ 学校がクラス単位で現場見学会を実施したいと思っても、窓口が不明、安全上の問題、受入れ態勢等から、積極的に動けないのが実態である。また、その建設現場で、児童・生徒に対して説明のできる人材がいないように思われる。</li><li>・ アメリカ・ボストンでは、高速道路ネットワークを中心とした大型の開発がなされており、科学博</li></ul>

物館に、これに関する展示がある。非常に臨場感にあふれた展示物で、興味深い。日本には、このように現在進行中の工事に関する展示物は少ない。建造物関係の展示物を企画して、主要都市の博物館を巡回するようなことをやればよい。

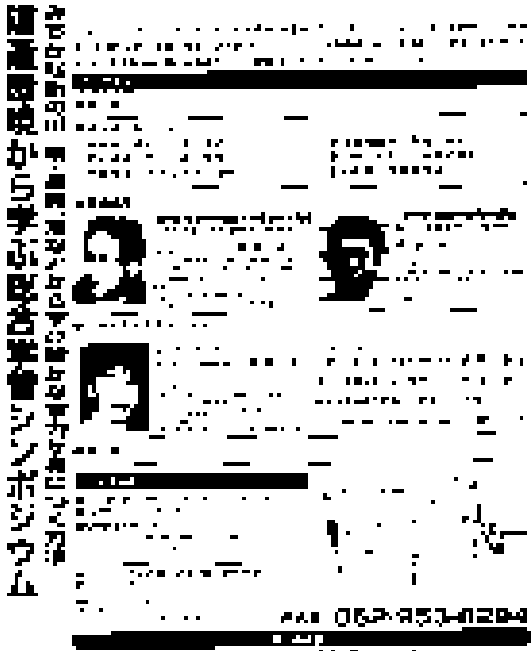


図 2 - 1 4 . シンポジウムの案内

## ⑧社団法人 土木学会（土木教育委員会生涯学習小委員会）

<b>a. 建設業のイメージアップ等に資する活動の概要</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 土木学会の土木教育委員会では、大学・大学院・高専・工業高校等の土木学科系の学生・生徒の教育をどうするかということを議論している。</li><li>・ 生涯学習小委員会は、総合学習をやるグループと、教材を作るグループに分かれている。</li><li>・ 現在、目黒区の小学校にて総合学習の実施に関する活動を試行的に行っている。これの評価がよければ、来年度以降、土木工学を総合学習に活用するための活動に着手する予定がある。</li><li>・ 目黒区の小学校での総合学習は、12月に実施する予定だが、その準備は去年から行っている。</li><li>・ 対象は5年生で、テーマは環境。水質、大気、騒音について計測し、自分達の町の環境と、他の町の環境を比較する。</li><li>・ 測定の前に、5年生に対して環境の話を実稲田大学の先生が実施した。</li></ul>
<b>b. 活動の推進体制／連携相手</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 上記の総合学習のテーマは環境であるが、土木工学の内容について事前に小学校の先生に対してレクチャーを実施した。</li><li>・ 基本的に児童に直接教えるのは小学校の先生としている。</li><li>・ 土木の人間（建設コンサルタント）は、先生への事前のレクチャー、測定の手伝いという裏方の仕事を担当する。</li><li>・ 実際の測定は、児童のいくつかの班に分けて実施する。各班に2名の手伝い（建設コンサルタント）をつける。</li></ul>
<b>c. 活動に対する反響／効果</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 上記の総合学習は実施前なので、児童の反響はまだない。</li><li>・ 事前に実施した小学校の先生への土木工学に関するレクチャーは、好評であった。土木工学が生活に密着している幅広い学問で、総合学習で何かをするときには、土木工学のどこかの分野がヒットするということに驚いていた。</li><li>・ 測定前の早稲田大学の先生の話では、子供たちにとって難しいと思われる箇所については、小学校の先生がその都度、子供たちの関心をつなぎとめるようにしていた。</li></ul>
<b>d. 活動の実施に当たっての課題／問題点</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 総合学習においても、基本的に児童に直接教えるのは小学校の先生で、業界の人間はあくまで手伝いというスタンスがよい。児童に教えることは、小学校の先生が最も適している。</li><li>・ 業界の人間は、小学校の先生に対してレクチャーをし、小学校の先生が自分で総合学習の内容を組み立てられるように支援するのが望ましいが、そのレベルに到達するには非常に時間がかかる。</li><li>・ 小学校の先生に対して、レクチャーのできる人間が業界に少ない。</li><li>・ 現状、そのような取り組みを効率的にできる仕組みが業界に存在しない。</li></ul>
<b>e. その他の特記事項</b>
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 現場見学を単独で実施しても一過性のイベントに過ぎない。効率的な現場見学のためには、総合学習のような一連の流れの中で、子供たちに問題意識を持たせてから実施することが必要。</li><li>・ 建設業界の人間が、総合学習等で貢献することにより、児童に対するイメージが変わり、将来的にイメージアップにつながるだろう。</li><li>・ 小学6年生くらいになると、自分の学力に漠然と気付くそう。建設業界の人間が、総合学習・地域活動等で社会貢献をすることによって、「数学はできないけど、土木という分野で立派に活躍できる」というような意識を持ってもらい、将来の職業の選択肢として建設業を認識させることに意義がある。</li></ul>

- 従来、業界・行政の方で、子供向けの教材・テキスト等を色々作成しているが、子供たちに考えさせるという点が不足しているようだ。
- ハザードマップも小学生に作らせることができる。ハザードマップは、土地の高低という知識があれば、ある程度のものは作れる。もちろん、間違ったものを作らないように指導する必要があるが、その指導は業界の人間がしてあげればいい。
- バリアフリーのまちづくりというのも、子供たちに考えさせることができる。例えば、6年生になると「勾配」という概念が出てくるそうだが、車椅子を押させて、どのくらいの勾配なら大変なのかをわからせる。何%の勾配かは、測量すればすぐわかることだが、小学校の先生は、測量すれば分かるということ、測量は土木工学の一分野であること、が分からない。測量の実施あるいは指導を業界の人間がしてあげればいい。
- 小学生のすることは、保護者、特に母親の興味が高いようで、総合学習等を通じて建設業界が貢献をすれば、保護者に対するイメージアップにもつながる。



## ⑨その他

以下に、建設業のイメージアップ・理解促進に資すると思われる活動・事例について概説する。

### a. (社) 島根県建設業協会

- ・ 幼児を対象とした絵本「きかいはちからもち」を作成した。これは、飛び出す絵本で、建設機械の動きが楽しめる。
- ・ 小学生を対象としたマンガ「夢まち探検隊」を作成した。これは、小学生が主人公となり、自分達の町で作られるビルに自分達の親が、設計者、建設機械運転手、とび工、電工として関わっている模様を見て、建設業への理解を深めるという内容である。



図2-15. 小学生向けマンガ（左）と幼児向け絵本（右）

### b. 国土交通省関東地方整備局「建設技術展示館」

- ・ 「最新の建設技術に関する情報を発信し、新技術の活用を促進する」「建設技術が市民の暮らしと都市機能を支えていることについて理解していただく」「建設技術を次世代へ継承・発展する」ことを目的に開設された展示館。
- ・ 屋内展示場では、最先端技術を生活との係わりの中で分かりやすく説明した新技術コーナー、来館者自らが体験できるふれあいコーナー等が設置されている。
- ・ 屋外展示場ではシールドマシンや多自然型護岸等の実物展示、44種類の舗装技術を紹介した舗装新技術プロムナード、樋門・共同溝の施工プロセスの展示、車椅子の体験ができるバリアフリー体験、歩行者ITSコーナー等が設置されている。
- ・ 「体験教室」と銘打って、小学生（中高学年）を対象に授業の一環として建設技術に触れたり、自然や人間と建設技術との関わりを学ぶことにより、建設技術の楽しさや

すばらしさ、市民生活とのかかわりを伝えられる活動を実施している。

- ・ 「体験教室」は約2時間の内容で、講師は国土交通省関係者である。実施に当たって、学校サイドの費用負担はない。また、万一のために傷害保険をかけている。



図2-16. 「建設技術展示館」の屋内展示場（左）と屋外展示場（右）

c. (財)日本科学技術振興財団「科学技術館—コンストリアム」

- ・ 建設関連技術の紹介。展示物の企画等は、(社)日本建設業団体連合会が行っている。
- ・ コンストリアムには、「ドリームトンネル」「スーパー建機シミュレータ」「建設おもしろBOX Q&A」「耐震実験わくわくプログラム」のコーナーがある。
- ・ 「ドリームトンネル」は、シールドトンネル、山岳トンネル、開削トンネルについて紹介されている。
- ・ 「スーパー建機シミュレータ」は、シミュレータを操作することにより、未来都市の建造物を積み上げていく。
- ・ 「建設おもしろBOX Q&A」は、建設関連のテーマについて、ディスプレイからビデオ音声による質問に対して、2または3つの回答から正解を選択する。
- ・ 「耐震実験わくわくプログラム」は、講師が実物模型を使いながら実験を行い、解説を加える形式で行なわれている。小学校5、6年生程度を対象にした説明で、一回20分程度で1日5回開催される。



図2-17.「コンストリアム」の展示場

d. (社)土木学会関西支部「土木出張講座」

- ・ 小学校・中学校に対し、土木の専門家・有識者を派遣して講演・講義を開催している。
- ・ 平成14年までに小学校・中学校で5回の実績があり、講演・講義の内容は、地元の城と石垣、上水・下水等の水環境、河川氾濫等の水害、等である。

e. 塗り壁隊

- ・ 建築家の方が代表で、建築物の壁を土壁作りをボランティアで手伝う活動を、平成11年から展開している。
- ・ 塗り壁隊の代表の知人が都内の中学校の校長と知り合いで、この知人の紹介で中学校において総合学習の一環として塗り壁隊の活動を平成14年10月に行った。
- ・ この総合学習では、塗り壁隊による土壁制作の指導の他に、大工による木工品の制作も同時に行われた。また、その2週間前に、大学の教授から伝統工芸に関する講演が開催された。
- ・ 事前に、学校の教師に対してレクチャーを行い、分刻みのスケジュールを作成した。
- ・ 課題は、授業での時間が足りないこと、そのため準備・後片付けを生徒にさせられないこと、材料等の費用がかかることである。